

K- 875

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第15集

# 山野辺城跡発掘調査報告書

—— 三 の 丸 地 区 ——

2008

山辺町教育委員会

## 序

この報告書は、山辺町教育委員会が調査主体となって、山野辺城跡西辺の三の丸の一部を発掘調査した結果をまとめたものです。

発掘調査地は、三浦一男氏所有地で最近まで果樹園であったが、宅地に開発される予定のため発掘調査を実施したもので、平成19年4月20日から開始し、6月4日に終了した。

山野辺城はいつ築城されたかその年代は不明であるが、関ヶ原の戦いの直後、慶長6年(1601)山野辺義忠が城主になって、領地1万9300石を与えられたので、本丸をはじめ二の丸・三の丸を築き、西部には四の丸(出だ丸)まで造ったという。また、城の東側に城下町を設け二・六・九の付く日に場所を違えて市場などを整備し、現在の大字山辺の基礎を築いた。

しかし、本家の山形城主最上家が義光亡き後、山野辺義忠もからんだ相続争いのため、元和8年(1622)幕府から改易され、山野辺城もわずか約20年にして破却されてしまった。

今回、発掘調査した土地は三の丸にあたり、山野辺義忠の家臣が屋敷を構えていたところと推定されていた。発掘の結果、柱穴・土壙・溝・井戸跡などの遺構が発見され、数棟の建物跡が確認された。出土した遺物は、最も多いのが近世の陶磁器で、中世の珠洲系陶器なども出土している。また、この土地は最近まで果樹園であったが、それ以前は屋敷地であったので表土には近現代の陶磁器が多く混入していたという。

なお、山野辺城跡の発掘調査は、平成17年に山辺町による道路整備事業のため、旧役場跡地の本丸東辺の一部も行い一定の成果を得たので(2006年山辺町教育委員会発行『山野辺城跡試掘調査報告書』)、あわせて山辺町の郷土史研究の一助となればと存じます。

最後に、調査にあたってご指導とご協力いただきました関係各位の方々に心から感謝申しあげます。

平成20年3月

山辺町教育委員会

教育長 飛塚光男

## 例　　言

1. 本書は宅地造成事業に係わる「山野辺城跡」三の丸地区の発掘調査報告書である。

2. 緊急調査は、事業主の依頼により、山辺町教育委員会が実施した。

3. 調査要項は下記の通りである。

遺跡名	山野辺城跡（やまのべじょうあと）
調査対象地	山形県東村山郡山辺町大字山辺字西町990-3、899-1 及び899-2、900-4
遺跡番号	県遺跡番号 345 城館番号 301-014 山辺町遺跡番号 YM1
調査期間	平成19年4月20日～平成19年6月4日
調査主体	山辺町教育委員会
調査面積	約1,800m <sup>2</sup>
調査体制	調査員 茨木光裕（日本考古学協会会員） 調査補助員 久連山良夫 調査作業員 伊藤重雄・伊藤豊・小松紗耶加・遠藤京子 久連山八雄・伊藤繁雄 事務局 飛塚光男（教育長）・峯田誠一（教育課長） 樋口秀顧（教育課長補佐）・佐藤ゑつ子（社会教育係長） 調査協力 株式会社太平堂不動産・山形寿地所有限会社 三浦見知男・株式会社武田組

4. 本書の作成・執筆は茨木光裕が行い、編集は山辺町教育委員会が担当した。

5. 調査の記録、出土遺物等は、一括して山辺町教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

S B…建物跡	S D…溝跡	S K…土壙
S A…柱穴列	S X…性格不明遺構	E P…柱穴

2. 遺構番号は、遺構確認時に付した番号を踏襲した。分類記号はその後の精査によって変更した場合もある。

3. 本書挿図の方位は磁北を示している。

4. 調査区に設定したグリッドは、座標系に拘らず現地に合わせて任意に設定した。グリッド南北軸は、N-12° 26'-W

5. 遺構実測図は、土層断面図1/10、平面図は1/20で採録し、各挿図にスケールを付した。

6. 遺構実測図にある水系レベルは標高を示している。単位はmである。

7. 土層の土色は、『新版標準土色帖』（昭和45年）による。

# 目 次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の方法と経緯	
II 遺跡の概要.....	1
1 遺跡の立地と環境	
2 基本的層序と遺構	
III 検出された遺構.....	3
1 SB1、SB2建物跡	
2 AS3堀跡	
3 土壙と溝跡	
IV 出土した遺物.....	5
V 調査のまとめ.....	5
抄録.....	40

## 挿 図

第1図 山野辺城跡三の丸（西町）地区字限図	第2図 山野辺城跡概要図
第3図 主要遺構配置図	第4図 主要遺構全体図 調査区土層断面図
第5図 SB1・SB2平面図	第6図 SB1・SB2柱穴断面図
第7図 SA3実測図	第8図 SK16・SK17・SX18実測図
第9図 SK60・SD56実測図	第10図 SK135・SD134実測図
第11図 SK105・SD101実測図	第12図 SK68・69実測図
第13図 出土遺物実測図（1）	第14図 出土遺物実測図（2）

## 写 真 図 版

- 図版1 1. 調査区全図（調査前） 2. 試掘・三の堀検出状況 3. 遺構掘り下げ状況  
4. 遺構確認状況 5. 調査区全景 6. 精査区全景（西より）
- 図版2 1. SB1、SB2、SA3全景（南より） 2. SB1、SB2、SA3全景（北より） 3. SB4全景（北より） 4. 雨落ち溝全景 5. SK68、69近景  
6. 雨落ち溝近景
- 図版3 1. SX18 2. SK16、SK17 3. SK60完堀状況 4. SK60土層断面  
5. SK135 6. SD134
- 図版4 1. SK68、69 2. SK68、69近景 3. SK68、69遺物出土状況  
4. SK68、69近景
- 図版5 各柱穴、掘方近景

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

山野辺城は、山辺町中心街の西側高台に位置する中・近世の城館跡である。慶長6年(1601)に山野辺義忠が山野辺城主として入部し、現在の町割りの基礎となる城下の整備を行った。

平成18年11月に、山辺町大字山辺字西町地内で、開発計画に伴う埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあった。この地区は、前述したように近世城下町の整備に伴って、主郭(本丸)西側に掘られた二の堀と三の堀にはさまれた地点に位置し、三の丸(仮称)に相当する地域に当たる。従って、山野辺城跡に係わる遺構の存在が考えられたので、平成19年1月11日～12日に試掘調査を実施した。

試掘調査は、開発予定地の北側にAトレンチ、南側にBトレンチを設け、重機で地山面まで掘り下げて遺構や遺物の有無、層序等について確認した。(第1図)

その結果、トレンチ西端で南北に連なる大溝が検出され、現在、水路として残るのみであるが、いわゆる三の堀に対応する落ち込みと考えられた。この堀状の落ち込みに接して西側に地山の高まりが確認され、堀の内側に造られた土塁の基底部と推定された。その東側に遺構が集中して検出されたことから、工事の掘削深度によっては事前の調査が必要となった。

試掘調査の結果を受けて遺構の保存等について協議を重ねたが、開発予定地の東半部が削平され遺構が破壊されるため、事前調査を実施することとした。

### 2. 調査の方法と経過

現地での調査は平成19年4月20日より開始し、重機を用いて地山直上まで掘り下げ面整理・遺構の検出を実施した。当初、工事に伴って遺構が削平されると考えられる区域を全面にわたって掘り下げたが、調査区西半部は地山面が深く直接、工事による影響がないと判断されたので、精査は行わなかった。

調査区の東側地区では、全ての遺構について精査を行い記録作成、写真撮影を実施した。遺構の精査がほぼ終了した段階で、5月31日に現地で調査説明会を開催し、山辺小学校児童の見学もあって約100名の参加があった。その後、図面の作成、遺物の取り上げを行い現場を撤収したのは6月4日で、現地での実働調査期間は28日である。

## II 遺跡の概要

### 1 遺跡の立地と環境

山野辺城は、白鷹丘陵山麓部を縫うように南北に走る交通路と、丘陵を横断する東西の交通路が交錯する要衝に位置している。山形城下から放射状に延びる交通路の要衝には、長谷堂城

や成沢城、高橋城、二本堂堀などのように最も領内を守る拠点的な城館が配置されていた。山野辺城は寒河江や宮宿方面の大江氏に対する最上氏の抑えとして重要な位置を占めていた。

城地は白鷹丘陵山麓部から舌状に張り出した台地の先端部に立地している。主郭は台地端部の小丘を利用し、東西約70m、南北約90m程の規模で、標高115mを測る。東側の丘陵麓からの比高は13m程で、主郭（本丸）から東側の山形盆地平野部が開けた環境にある。主郭から一段下がった周囲の平坦地は、東西約210m、南北約320mの略方形を呈し副郭（二の丸）を成している。近世の絵図によれば、主郭と副郭の周囲には堀が廻り、その周間に三の堀があり寺院が計画的に配置されていた。（第2図）

山野辺城はその立地状況から、西側の防備が脆弱であることが指摘でき、そのため主郭西側に四の堀と出丸を配し防御を固めていたと推測される。そのような現在確認できる山野辺城の様相は、城廬絶期の状況を反映しており時期的には17世紀前半頃の時期である。慶長6年（1601）に山野辺義忠が城主として入部し城下の整備が進められたが、慶長19年（1614）に最上義光が山形城内で病死し、その後の家の内紛によって最上家は元和8年に改易された。その時、山野辺城も最上家の改易によって廬城となっている。

## 2 基本的層序と遺構の分布

### 1. 遺跡の層序

前述したように、調査区の北側は地山が深く直接、開発に伴う影響はない判断されるため、部分的な遺構の確認に留め精査は実施していないが、部分的にサブトレンドを設け地山面の深さは確認した。（第3図）

調査区南端の東西方向で確認した層序（A～D断面）によると、基本的に表土の下位にぶい橙や褐色を呈する粗砂質の土層が堆積している。この2、3層は樹根の侵入が著しく、近現代の陶磁器片を含み、煙突の耕作土である。遺構の精査を実施した調査区東半部では地山面の深さは地表より約30cm程で比較的浅い。地山は灰褐色の粘質土で、直上に部分的にぶい赤褐色の粘質土が認められる。

C～D断面では、3・4層の下位に灰赤色や暗赤褐色を呈するやや粘質の土層が厚く堆積しており、地山面は表土下約8.5cmである。調査区西側で認める6、7層の成因は確証はないが、試掘調査で確認された三の堀に対応する溝状の落ち込みの内側に在ったと考えられる土塁が削平されたことによる堆積土である可能性もある。（第4図）

### 2. 遺構の分布

精査区で確認できた遺構は、柱穴（E P）や土壤（S K）、溝（S D）、性格不明な遺構（S X）などである。柱穴は、調査区のほぼ全面に分布するが、東端部は南北方向の道路面向かって削平されている。柱穴には、方形を呈するアタリの明瞭な掘立柱や拳大の根堅石を伴うも

の、比較的大きく浅い礎石の据え付け跡と考えられるものなどがあるが、礎石が残されているものは認められない。また、柱穴のアタリは、角柱と円柱がある。

これらの柱穴のセット関係から數棟の建物跡が確認され、S B 1は縦柱の比較的大型の建物跡で、S B 2建物跡と重複する。S A 3は壠列と考えられる。S B 4は精査区の西縁部に位置し部分的な検出であるが、S B 1と対応する建物跡の存在が想定できる。

溝跡には、幅40cmの南北に走る浅い5条の溝と精査区西で確認された大溝がある。前者は掘り込みがかなり浅く、セットとなる柱穴列も検出されないことから建物に伴う雨落ち溝ではなく、耕作等に伴う溝跡と思われる。

また、建物跡の外周を画すると考えられる屈曲する方形区画を意図した溝跡が確認され、規則的に区画された屋敷割が存在したと推測される。溝内部には拳大程の礎が列を成して組み込まれ、排水溝として機能していたと考えられる。

土壤として一括した遺構には、平面形が円形、方形、隅丸方形を呈するものなど、様々な形態がある。そのなかで、円形を呈し比較的深く掘り込まれたものは井戸跡と考えられる。

これらの遺構は、かなりの重複と切り合いが認められ、その前後関係を考えると5時期以上の時期的変遷が認められる。出土遺物も平安～近現代に至る長期にわたる各時期の遺物が存在し、遺構の変遷も長期の変遷が認められる。（第3図、第4図）

## III 検出された遺構

### 1 S B 1・S B 2建物跡

精査区のほぼ中央で確認された建物跡であるが、調査区の関係で部分的である。S B 1は、3×3間以上の縦柱の建物跡で、南北する東西棟建物跡と考えられる。柱間は桁行2.4～2.9m、梁間約2.4mで、掘り方は一辺5.0～6.0cmの方形を呈し、中央部に径約2.0cmの円形のアタリが確認できる。

S B 2は、S B 1と重複し、S B 1の掘り方を切って建てられた建物跡で、東西6間以上、南北3間以上の規模である。部分的な検出であるため全体の規模は不明であるが、東西約1.4mの等間、南北の柱間は1.9mである。掘り方は5.0～7.0cmの方形を呈し、角柱のアタリが確認できるものもある。（第5図・第6図）

### 2 S A 3壠列

S B 2建物跡と重複する柱列で、4間以上である。E P 90、E P 94、E P 114、E P 112、E P 104の各柱穴で構成され、主軸はほぼ北を向く。S B 2との前後関係は、両者の帰属する柱穴の切り合いがないため判然としない。各柱穴の間隔は1.6～1.9m程で、掘り方は一辺約6.0cmの方形や円形を呈する。主軸を同じくする建物跡や柱列が確認できず、セット関係は不明である。（第7図）

### 3 土壌と溝跡

#### (1) 井戸跡

S X 1 8 は精査区南東コーナーで確認された土壌で、遺構検出時の平面プランでは性格が把握しえなかつたが、掘り下げを実施し井戸跡と確認された。調査区の隅に位置するため全体は検出していないが、 $2.9 \times 1.7m$ 以上の方形土壌が掘り込まれ、北壁部分に径約1.5mの円形の深い掘り込みがある。方形土壌の底面は平坦で深さ2.5cm程度、円形掘り込みの深さは約90cmである。湧水があり覆土に炭化物を多く含み、素掘りの井戸跡と考えられるが、出土遺物は確認できず帰属時期は判然としない。(第8図)

S K 6 0 は、径1.6m、深さ約1.7mの円形土壌で壁は直線的に掘り込まれ、底面は平坦である。底面に木片や杭が出土し、井戸跡と考えられるが遺物は特に認められない。(第9図)

S K 9 は S D 1 3 4 を切って掘り込まれた土壌で、井戸跡である。径約2mの円形を呈し、深さは1.9mで堆積土は黒褐色の粘質土が主体を占め、湧水も多い。特に遺物は確認出来ない。(第10図)

#### (2) 大溝 (S D 1 3 4)

S K 1 3 5 と重複し、切られた溝で、幅1.3~1.6mで走行は直線的でほぼ北向きである。調査ではトレンチ状に掘り下げ完掘はしていないが、断面U字形状を呈し底面までの深さは60cmである。覆土上面より珠洲系の中世陶器が出土している。(第10図)

#### (3) 土壌

今次の調査では、井戸跡のように深く掘り込まれた土壌のほかに、方形や隅丸方形を呈し、比較的浅い土壌が点々と分布する。S K 1 0 5 は $2.1 \times 1.4m$ 、深さ20cmで、覆土は茶褐色を呈する水平な堆積土からなる。特に遺物は無く性格や時期も不明である。(第11図)

S K 6 8・6 9 は、精査区北壁に接して検出された土壌で、遺構確認時2基の重複した土壌として登録したが、精査の結果、雨落ち溝であるSD 2 に切られた単体の土壌であることが確認されたが、遺構番号はそのまま踏襲した。大きさは $1.9 \times 1.3m$ 程の不整円形を呈し、底面は北壁部分に向かって傾斜し、最深部で深さ30cmである。覆土は、炭化物を多く含む黒色土や暗茶褐色土で構成され、西壁部分に径4.6cmの桶が据えられている。桶は基底部のみが遺存しており、内部には拳大の礫石や砥石破片が在った。(第12図)

#### (4) 区画溝 (S D 1 、S D 2 、S D)

今次の調査では3条の列石や礫石を集積した直線的に走る溝跡が検出された。(第4図) 調査区北壁に沿って検出されたS D 1 は、調査区壁に入り込んでいたため部分的な確認であるが、幅約30cmで小角礫石を溝内部に詰め込んだ状況である。

S D 2 はS D 1 と併走し、両者の間隔は約1mである。調査区中央部で直角に屈曲し南側に延び、西側にも接近して同様の溝が連なっている。これらの溝の幅は上場で約30cm程度、溝内部に部分的に径1.5~2.0cmの角礫石を列石状に配置したり、拳大礫石を充填したりして構築されている。溝自体は建物の周囲に掘り込まれた雨落ち溝と考えられ、屋敷地の区画を示すものと推測される。

### IV 出土した遺物

前述したように、今次の調査で確認した遺構の重複関係や切り合ひから数時期にわたる時期的変遷が考えられる。調査地は最近まで果樹園として活用されていたが、以前は屋敷地であったと考えられ、表土には近現代の陶磁器が多く混入している。また、精査を実施した区域は地山が淺く、後世の掘り込み等による擾乱による最近の混入も多く認められる。

調査区の西側は比較的地山が深く、S D 1 3 4 付近から糸切り無調整の須恵器坏が散点出土している。しかし、小破片であり当該時期の遺構も調査区内では確認されなかった。

さらに、大溝(S D 1 3 4)の覆土上面から珠洲系陶器が3点ほど出土した。調査期間の関係で、S D 1 3 4 は全掘していないので詳細は不明の点もあるが、珠洲系陶器は表面に条線状のタキ目、内面にアテ痕を有する壺破片である。また、青磁の小破片も出土しているが、遺構に伴うものではない。

今回の調査で出土した遺物で最も多く出土したのが近世の陶磁器で、土壌や柱穴覆土から出土している。また、雨落ち溝の礫石に混じて組み込まれている破片が比較的多い。

陶磁器の産地を検討すると、出土量が最も多いのは肥前系の陶磁器で、他に瀬戸や美濃、在地窯の製品等である。

第13図1~11は染付の磁器で碗、杯、皿、盃などがある。種々な意匠が描かれており、内外面に2条あるいは1本の染付團線が廻るものが多い。第13図12~15、第14図1~6は肥前、瀬戸、美濃系の各種陶器で、第14図3はSK 6 8・6 9から出土した抓みを有する盃で、底面に墨書が確認できる。第14図7、8は在地産のすり鉢である。

他の出土遺物としては、砥石などの石製品、桶などの木製品と径20cm程の柱根が残っているものもあった。

### V 調査のまとめ

今回の調査は、山野辺城の三の丸に比定される地区の宅地開発予定地の工事等に伴い遺構が破壊される部分に限定して実施した。従って、調査区の制約から、建物跡等のまとまりのある遺構の確認は部分的なものである。

山野辺城は、寒河江大江氏の対する抑えの要衝として、戰国期の最上氏の境目に位置する拠点であった。慶長5年(1600)のいわゆる出羽合戦を経て、最上義光は出羽国に割譲を確立する。山野辺城には、翌年、山野辺忠義が城主として入部し城下の整備を行っている。小規模ながら主郭を中心として町場を包括した総構えの構造で、近世城郭として整備された。元和8年(1622)に最上氏が改易となり、山野辺城も廢城となるが、現在確認できる郭や堀の在り方はその廢絶期の様相を反映している。

近世の諸記録や絵図等によれば、本丸は東西40間、南北50間、二の丸の規模は東西116間、南北180間とある。三の丸については東西約270m、南北約370mの大きさで、

家臣の屋敷地であったと考えられる。

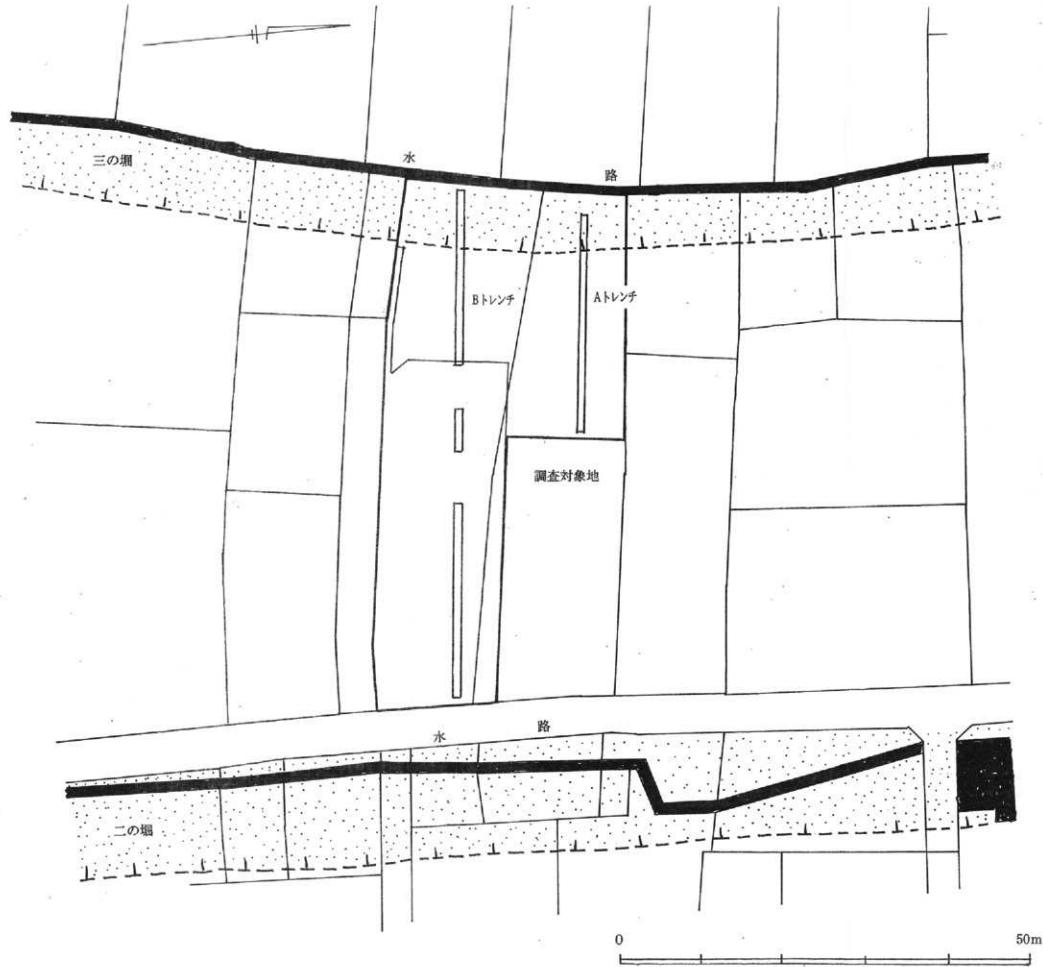
試掘調査で、調査区西辺に南北方向に連なる大溝の落ち込みと、溝東側に土壘の基底部と考えられる地山の高まりが確認された。現状は水路として残されているが、近世の絵図に描かれている三の堀に対応する遺構と想定される。二の堀は副郭周囲を廻る堀で、調査区東に接する南北の道路部分に存在したという。現在は埋め立てられて宅地となっているが、部分的にその形跡を伺うことができる。以上のように、今次の調査区域は二の堀の外側で三の堀に画された地域に相当する。

部分的な検出であり全容は把握していないが、L字状に屈強する雨落ち溝が検出されている。この雨落ち溝は、本来は方形の区画を意識したその一部と考えられ、字眼図の屋敷割りの状況とよく一致する。雨落ち溝とセットになる建物跡はSB1やSB4の可能性が高い。

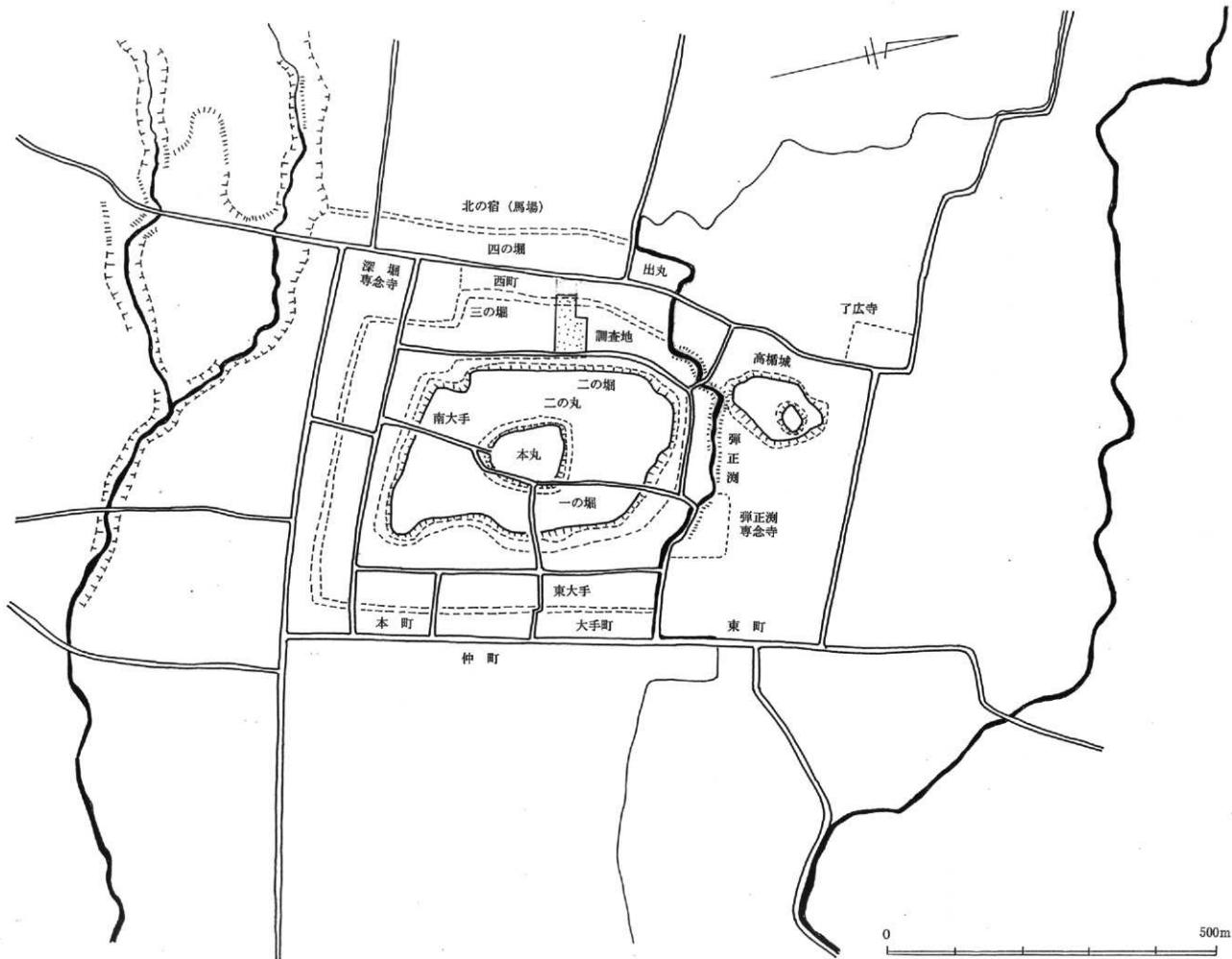
出土した遺物は、近世の陶磁器が主体をしめるが、9世紀後半と考えられる糸切り無調整の須恵器壺や中世の珠洲系陶器、青磁片が存在する。調査では平安期の遺構は確認されていないが、珠洲系壺・青磁片等は15世紀頃の時期で、SD134大溝が当該期に帰属すると考えられる。部分的であるため全体は不明であるが、ほぼ北を向き中世の屋敷地を区画する溝である可能性もある。

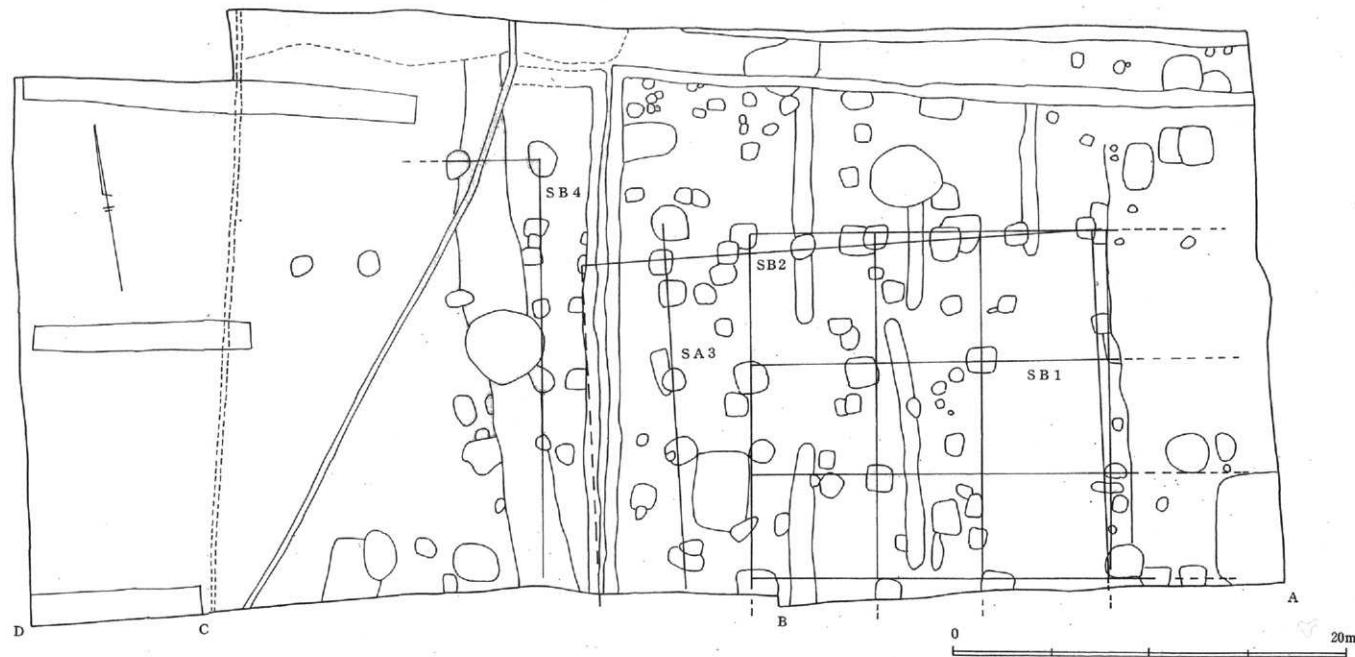
近世の陶磁器は、17世紀以降のものが主体を占め、直接三の丸が整備され存続した時期よりは新しい遺物と思われる。調査で検出された遺構は、切り合い等からかなりの時期的な変遷があり、17世紀代のものも含まれると考えられるが、城廃絶後に定住した家臣団や関係者の屋敷地として継続した遺構群と推測される。

本報告書では時間的関係もあり、出土した陶磁器について詳細な検討ができなかった。今後、時期的な検討と産地の特定等を行い、継続して調査する予定である。

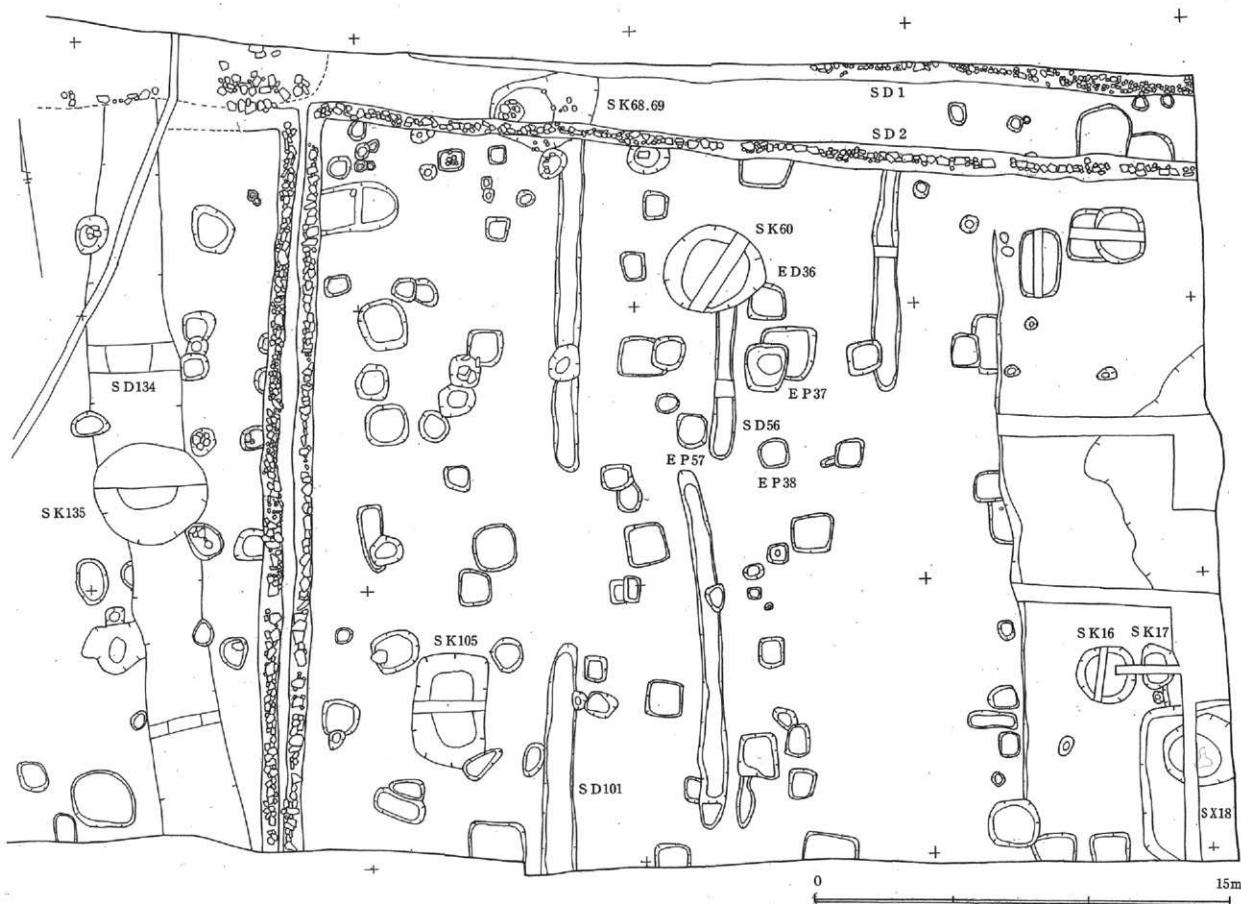


第1図 山辺城跡三の丸（西町）地区字限図

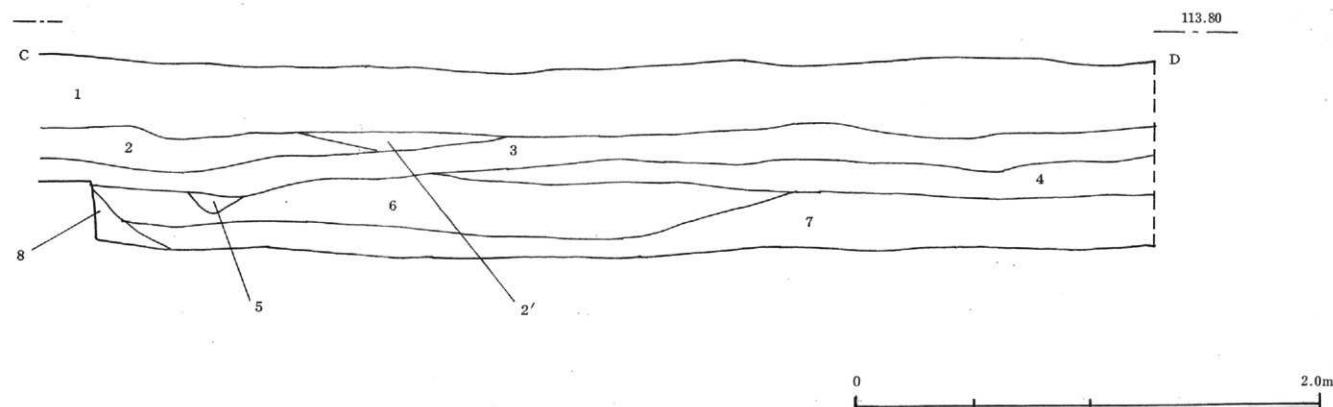
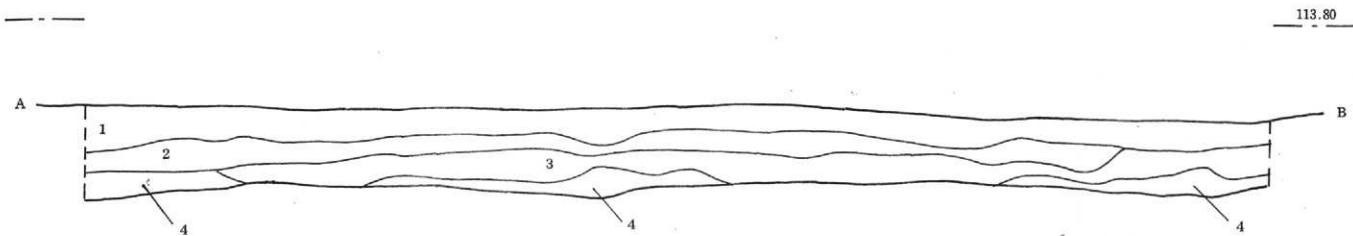




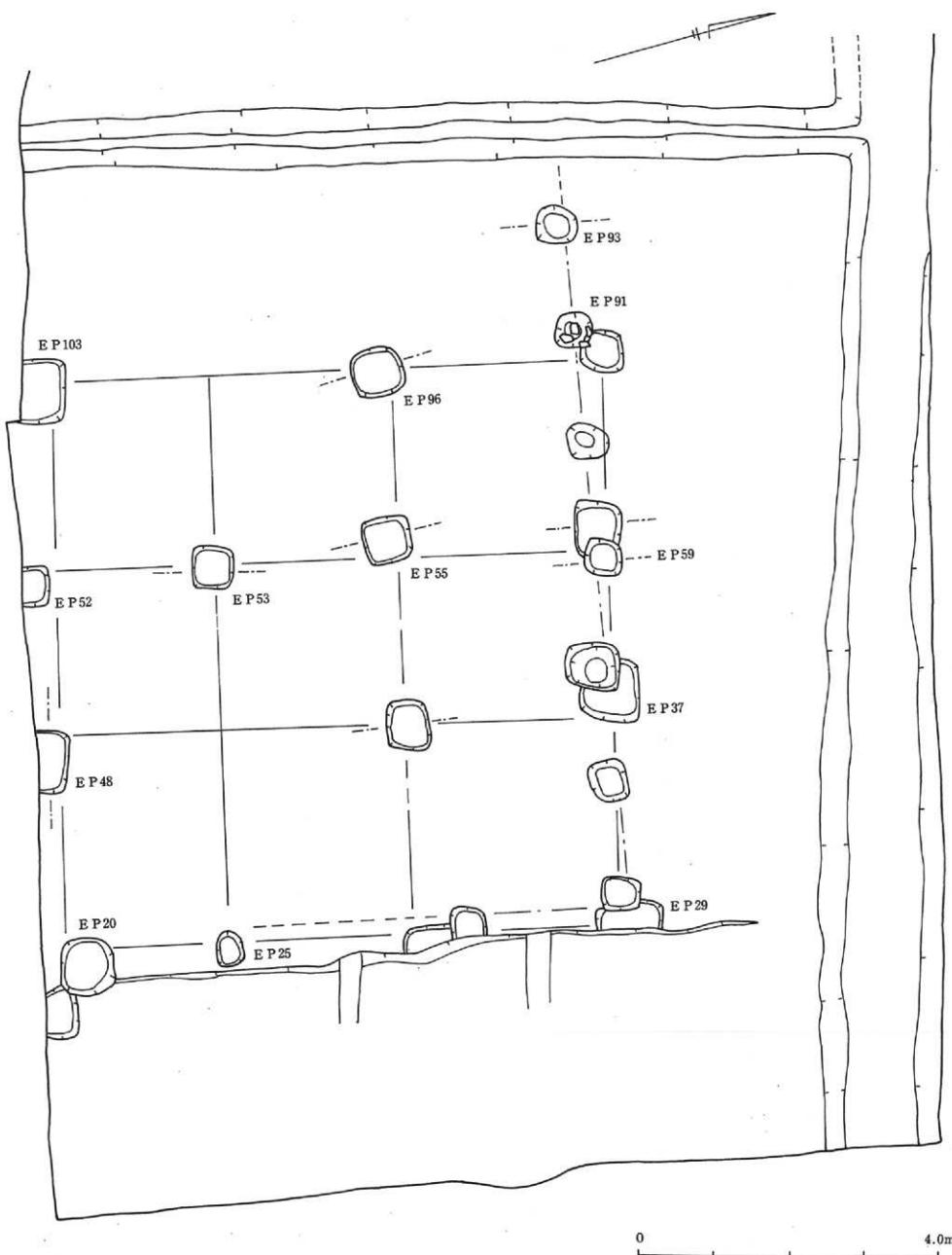
第3図 主要遺構配置図



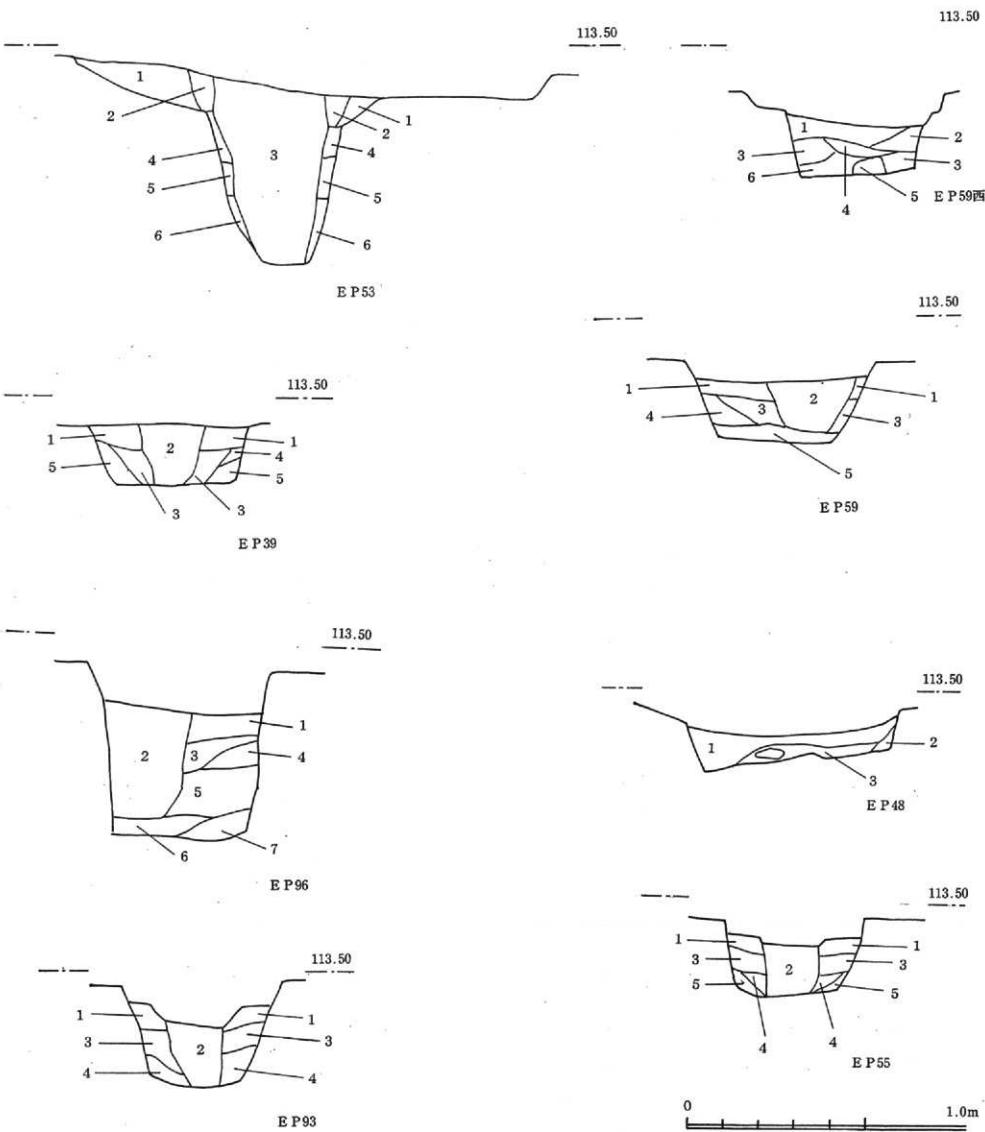
第4図 主要造構全体図



第4図 調査区土層断面図

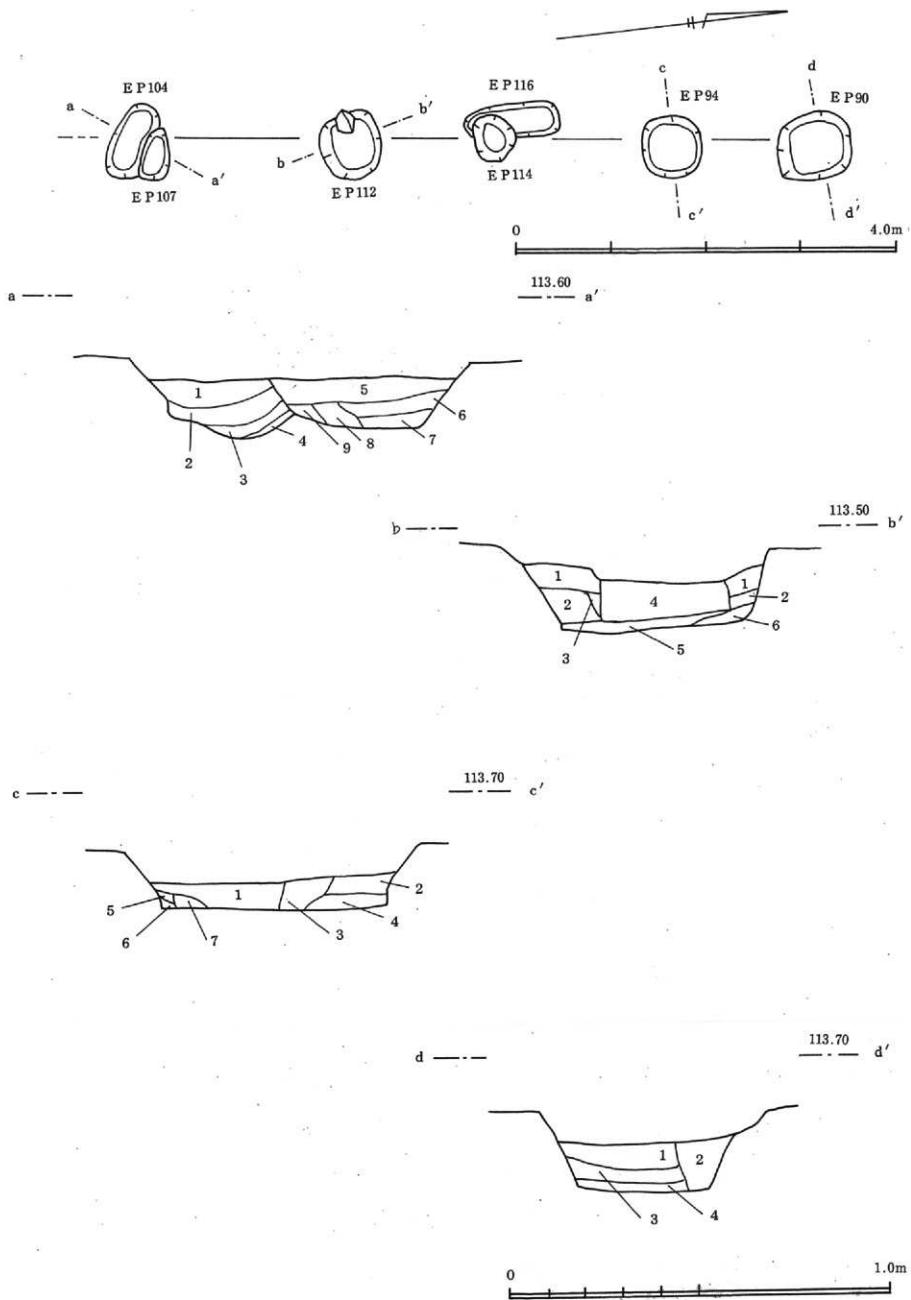


第5図 SB1・SB2平面図

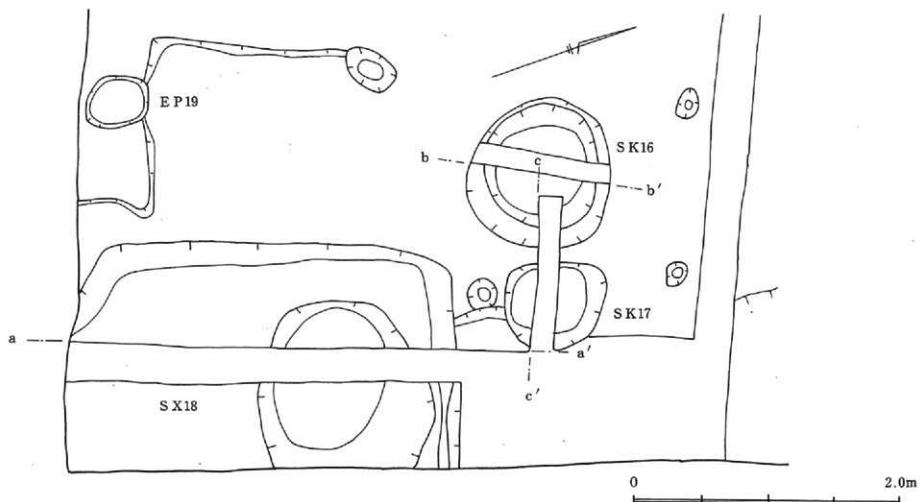


第6図 SB1・SB2 柱穴断面図

0 1.0m

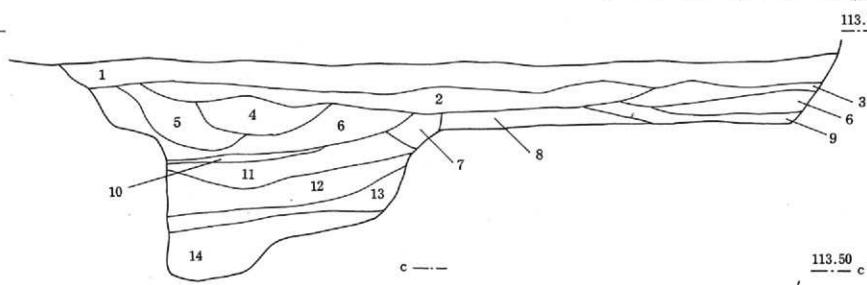


第7図 SA3 実測図



a ---

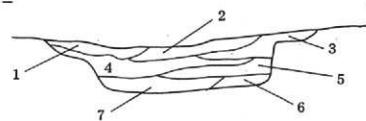
113.50 a'



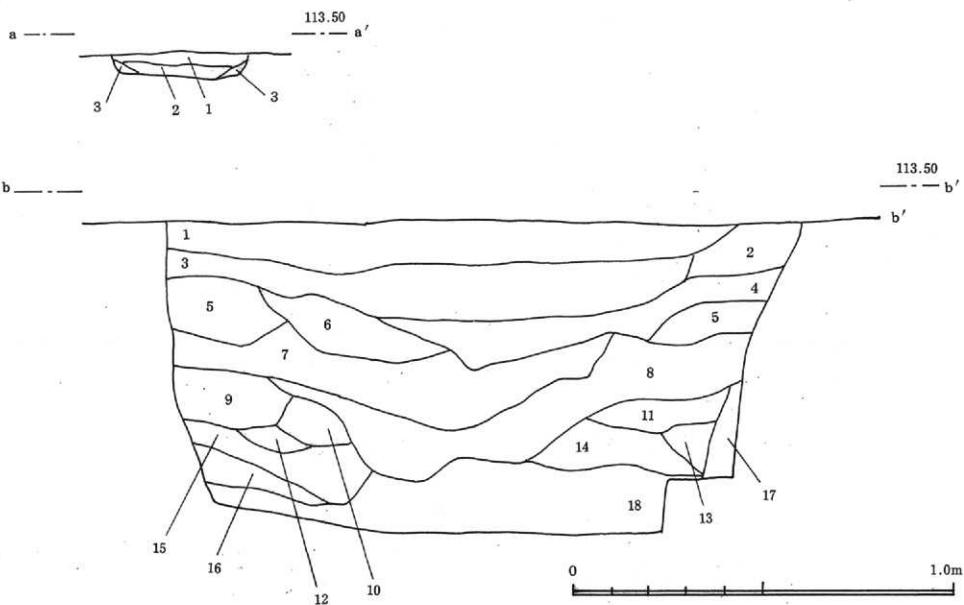
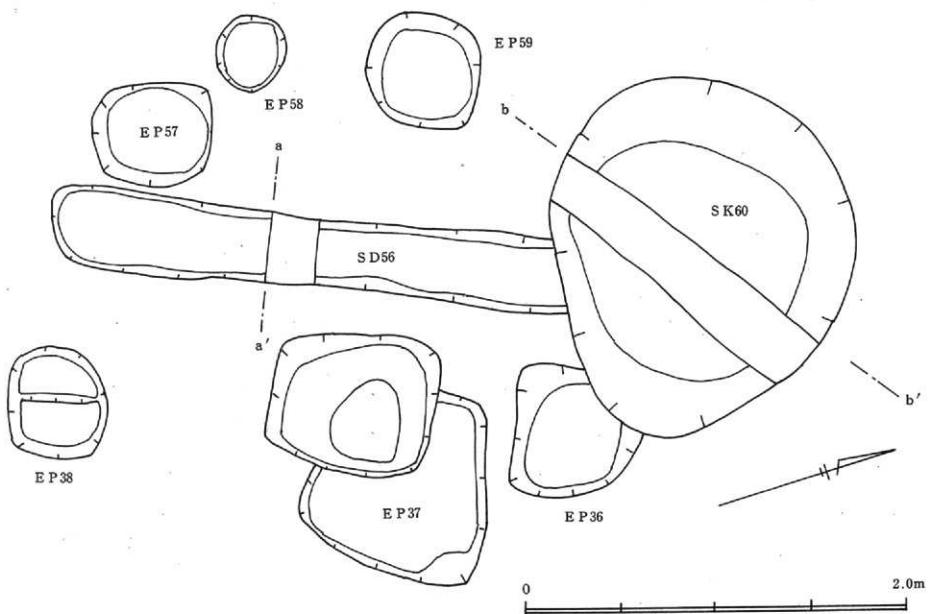
b ---

113.50 b'

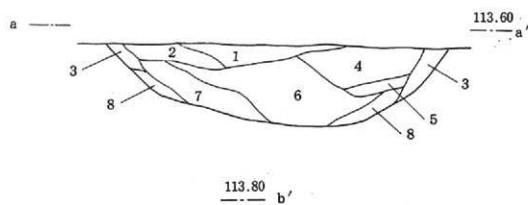
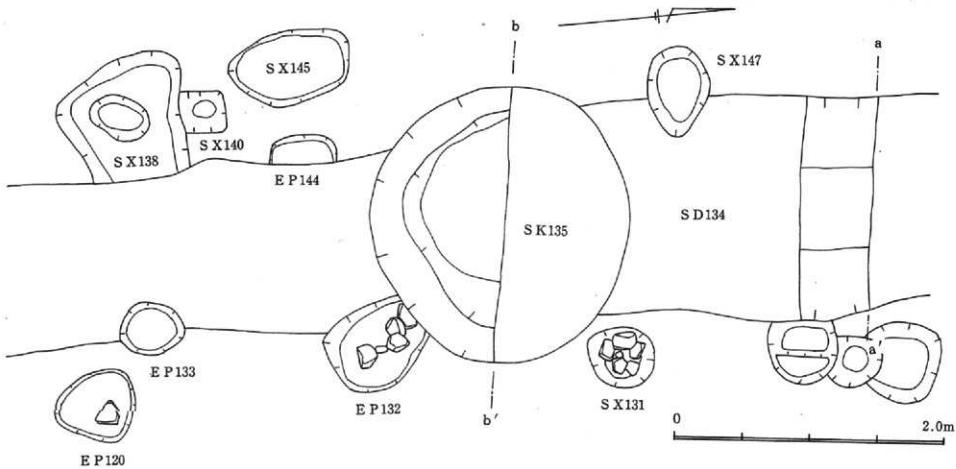
113.50 c'



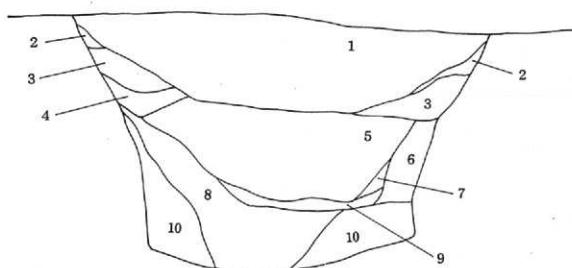
第8図 SK16、SK17、SX18 実測図



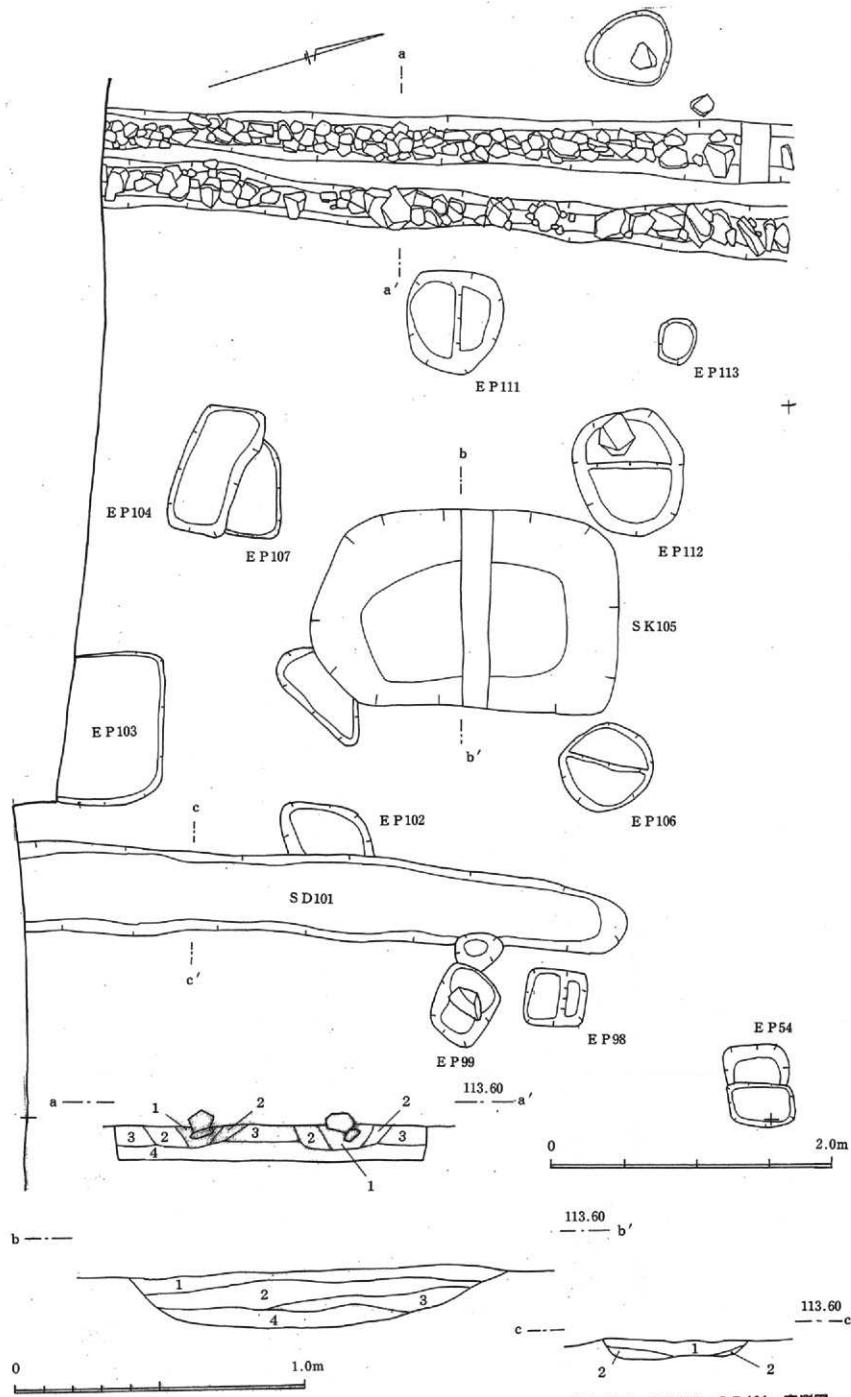
第9図 SK60、SD56 実測図



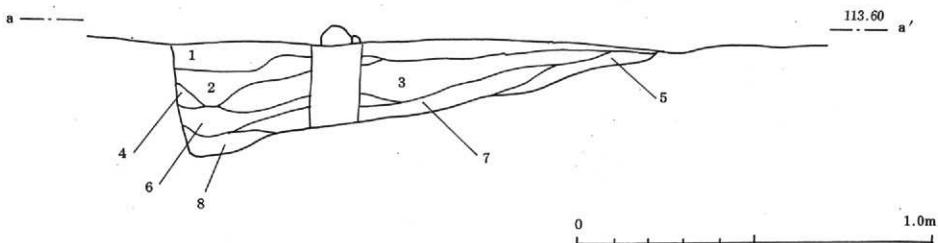
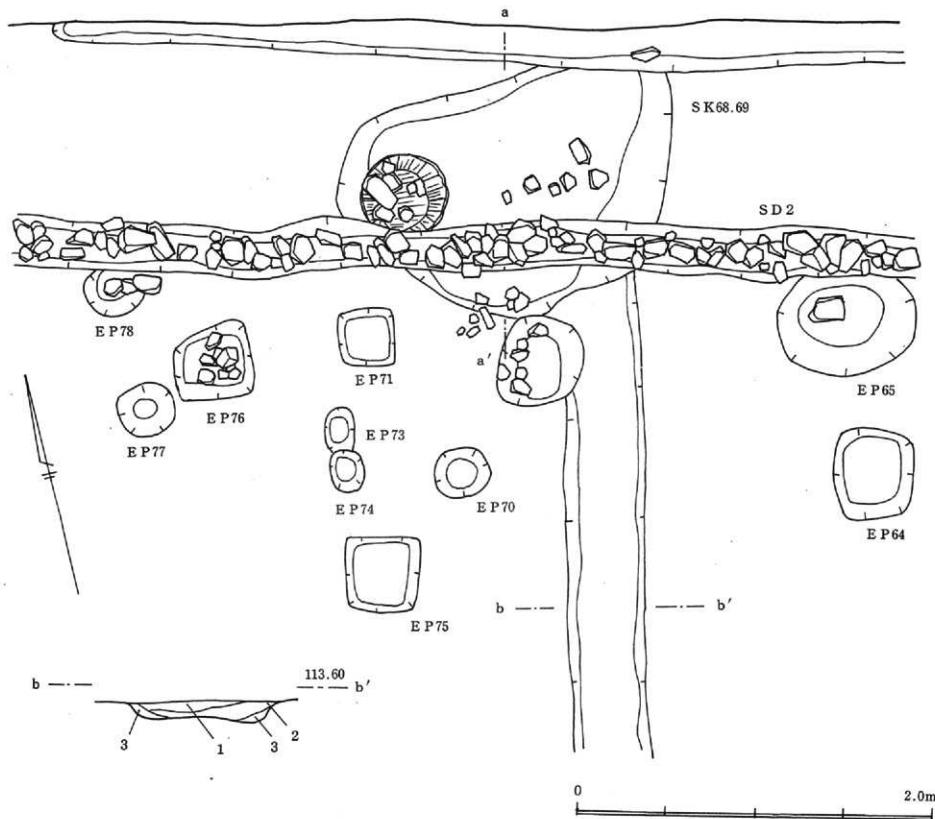
b ——



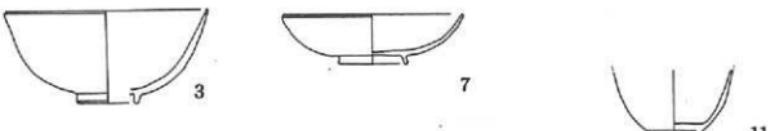
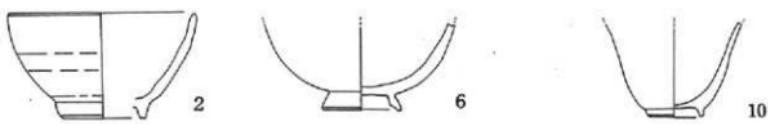
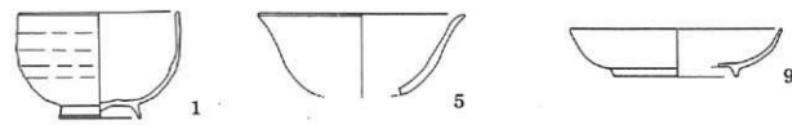
第10図 SK135、SD134 実測図



第11図 SK105、SD101、実測図



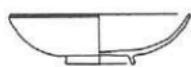
第12図 SK 68、69 實測図



7

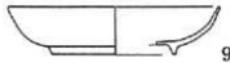
8

11

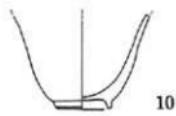


6

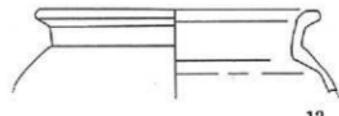
5



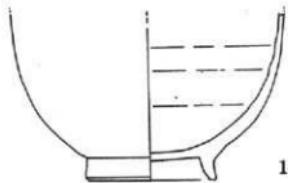
9



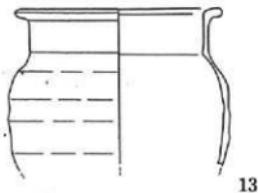
10



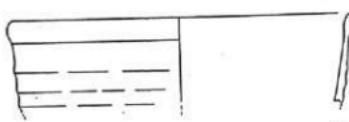
12



14



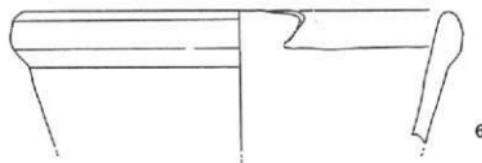
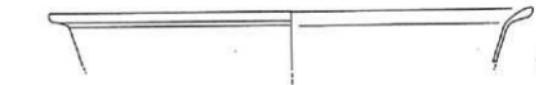
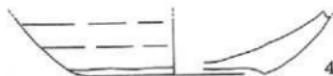
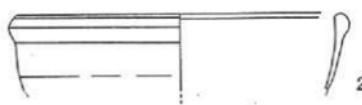
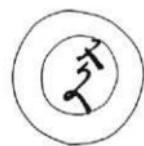
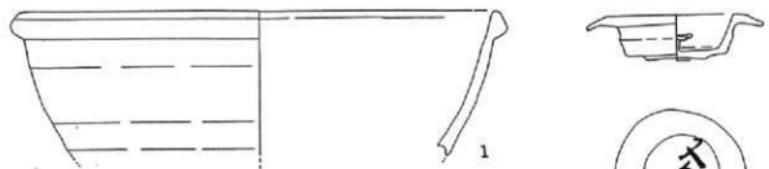
13



15



第13図 出土遺物実測図(1)



0 20cm

第14図 出土遺物実測図(2)



調査区全景（調査前）



試堀・三の堀検出状況



遺構掘り下げ状況



遺構確認状況



調査区全景



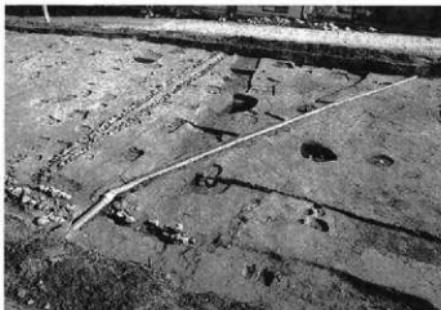
精査区全景（西より）



SB1・SB2・SA3 全景(南より)



同(北より)



SB4全景(北より)



雨落溝全景



SK 68・69近景



雨落溝近景



SK18



SK16 + SK17



SK60 窟窿状况



SK60 土層断面



SK135



SD134



SK 68・69



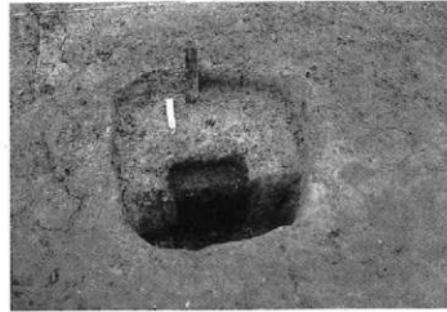
同近景



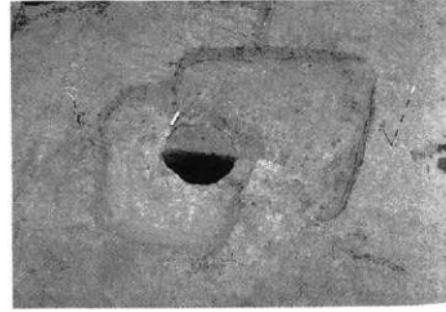
同・遺物出土状況



同近景



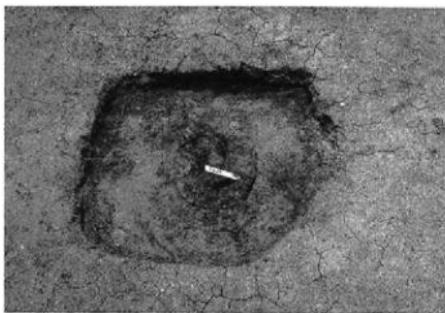
EP 98



EP 54



EP 37



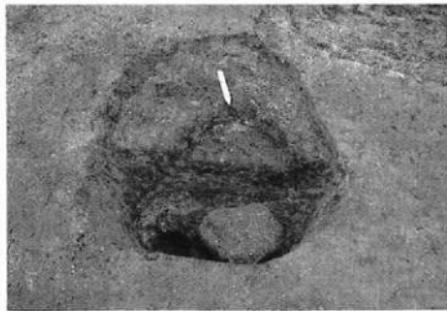
EP 93



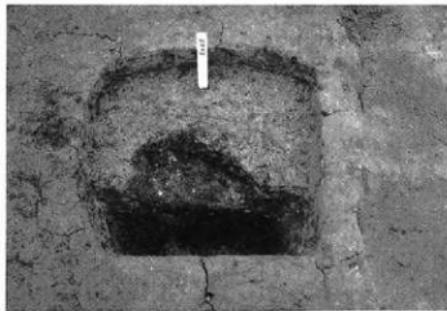
EP 55



EP 91



EP 112



EP 94

## 報告書抄録

ふりがな	やまのべじょうあとはくつちょうさほうこくしょ						
書名	山野辺城跡（三の丸地区）発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第15集						
編著者名	茨木光裕						
発行機関地 所在	山辺町教育委員会 〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地 TEL 023-667-1115						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
やまのべじょう 山野辺城	やまのべじょう 山形県 ひしんからやまぐん 東村山郡 やまとべじょう 山辺町 おおむねざやまのじ 大字山辺 あだにしまち 字西町	6301	345 山辺町 遺跡番号 YM 1	38度 17分 47秒	140度 15分 51秒	20070420 ↓ 20070604	1,800m <sup>2</sup>
所収遺跡名	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
山野辺城	民間宅地 造成工事	城館跡	中世・近世	堀立柱建物跡 柵列 井戸跡 溝跡	近世陶磁器 中世陶磁器 青磁 須恵器	近世城下の屋敷割りの一部が確認された。	

---

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第15集  
山野辺城跡（三の丸地区）発堀調査報告書  
平成20年3月 発行  
発行 山辺町教育委員会  
印刷 大 滝 印 刷

---